

若手連携の土壌作り

～気象気候若手研究者交流会の立ち上げ～

川瀬 宏 明^{*1}・杉 本 志 織^{*2}・下 瀬 健 一^{*3}・小 玉 知 央^{*4}
 稲 飯 洋 一^{*5}・沢 田 雅 洋^{*6}・坂 井 大 作^{*7}・中 野 満 寿 男^{*8}
 井 上 知 栄^{*9}・永 野 良 紀^{*10}

1. はじめに

2010年9月4, 5日, 博士課程3年から30代後半までの若手研究者を対象に, 第1回気象気候若手研究者交流会(以後, 交流会)を開催した。この交流会は, 若手研究者が自主的に周囲に働きかけ, 開催にまで至ったものである。交流会の具体的な内容や得られた成果, 今後の発展の可能性などについては, 「天気」の同号に掲載されている交流会の参加者によって執筆された報告を読んで頂きたい(柳瀬ほか 2011)。ここ

では, 企画・準備を行った運営者の目線で, 交流会開催までの経緯, 及び当日の様子について報告する。各章ごとに執筆者が異なり, 一貫した書き方になっていないが, それも各若手研究者の個性として読んでいただければ幸いである。(川瀬宏明)

2. 開催動機

この会を催すきっかけとなったのは, 以下の3つの動機である。

- ①他の研究者(特に同世代)との交流
- ②分野の枠を超えた共同研究の萌芽の場の創設
- ③主体性をもった人々による集団の形成

下瀬は地方の大学の出身ということもあり, 学生時代には他の研究者との交流が非常に少なかった。気象学会春季大会・秋季大会のみでは様々な分野の情報を網羅できず, かといって個々の研究会に参加するには, 予算等の面でも非常に負担がかかる。関東に出てきてわかったことは, この問題は関東近辺の研究者には理解されづらい点であるということである。交流をもてない以上, 共同研究が生まれる可能性は低い。一方, プロジェクトにかかわっていくうちに, どのようなことを興せば共同研究の萌芽につながるかイメージが出来るようになった。それぞれの人が「こういうことがやりたい」という意思をもっているはずである。ならば, その「やりたい」という意思をいくつも集めてふくらすことで, 様々な相互作用が生まれてくることも期待できる。この動機と志を同じくする川瀬, 杉本両氏とともに, 主体性をもった若手研究者がそれを表現できる場を用意したいと考え, この会を実施することを決意した。(下瀬健一)

*1 Hiroaki KAWASE, 国立環境研究所大気圏環境研究領域. kawase.hiroaki@nies.go.jp

*2 Shiori SUGIMOTO, 筑波大学大学院生命環境科学研究科. shioris@geoenv.tsukuba.ac.jp

*3 Ken-ichi SHIMOSE, 気象研究所/アルファ電子. kshimose@mri-jma.go.jp

*4 Chihiro KODAMA, 海洋研究開発機構 IPCC 貢献地球環境予測プロジェクト. kodamac@jamstec.go.jp

*5 Yoichi INAI, 名古屋大学大学院環境学研究科. inai.yoichi@i.mbox.nagoya-u.ac.jp

*6 Masahiro SAWADA, 東北大学大学院理学研究科. sawada@wind.gp.tohoku.ac.jp

*7 Daisaku SAKAI, 海洋研究開発機構 IPCC 貢献地球環境予測プロジェクト. daisakai@mri-jma.go.jp

*8 Masuo NAKANO, 海洋研究開発機構 IPCC 貢献地球環境予測プロジェクト. mnakano@mri-jma.go.jp

*9 Tomoshige INOUE, 筑波大学大学院生命環境科学研究科. t-inoue@envr.tsukuba.ac.jp

*10 Yoshinori NAGANO, 日本大学文理学部. nagano@chs.nihon-u.ac.jp

3. 交流会の準備 一漠から像へー

本交流会の実施において、もちろん多くの不安があったことは事実である。様々な考えを持った多くの若手研究者が集まったときに、はたして私たちが望んだような会になるのか。そこでまず、すでに交流のあった若手研究者数名に声をかけ、この会の構想を伝えるところから始めた。また、事前に模擬的な交流会をしておくべきと考え、2010年2月27、28日、本会の開催に賛同した若手研究者が箱根に集まり、模擬交流会（第0回交流会）を行った。（川瀬宏明）

小玉が初めてこの交流会の話聞いたのは2009年暮れ、同期である杉本から届いたメールがきっかけだった。そこには「大型プロジェクトに伴う縦割り研究社会を超えた若手同志の横つながりを作ろう！！ 他者の研究に対して自分が如何に新たな視点を提言できるか、またその逆も、，，，ということ具体的に話してみたい！！」（原文のまま）とあった。小玉自身は「プロジェクトで縦割りでどうのこうの」という大きな問題意識は持っていなかったが、「最近、同世代の研究者とざっくばらんに話していないな」と感じていた。同じような境遇の若手研究者とお酒を飲みながら一晩語り合うのも悪くないかなという軽い気持ちで、第0回交流会に参加した。（小玉知央）

2月27日、箱根温泉旅館に集められた11名の志士達に、川瀬、下瀬、杉本の描く熱い計画の全容が伝えられた。途中、3幹部の内紛に翻弄されながらも、我らの結束は乱れず第1回交流会の開催を固く誓い合った。ここに第1回交流会宿担当長稲飯、Web担当長小玉が誕生した。

開催地選定にあたり宿担当長は信じていた、「仕事や家庭を持つ全国の募集対象者が土日1泊2日で参加し易い場所」はこの国のどこかに必ず存在するはずであると。そして宿担当長は探し求めた、「第0回交流会で盛り上がったほろ酔い討論会を第1回でも開催するための全員収容可、持込飲食可、プレゼン可、深夜利用可、な設備を有する施設」を。しかしある大きな問題が立ちばだかった。応募人数予測不可能。宿の搜索は難航を極め、選定は不可能かに思われた。

（稲飯洋一）

ちょうどその頃、継続的な活動を見据えて、交流会名義で外部のレンタルサーバーを借りた。大学や研究

所のサーバーを借りる案も出たが、移籍の多い若手研究者が継続的に活動するために、所属機関に依存しないサーバーが必要と判断した。サーバー代は交流会の参加費からまかなうこととした。ここに運営者や参加者のメーリングリストを設置し、交流会用のホームページも作成した。運営者用のメーリングリストには交流会当日までに約200件の投稿があり、第1回交流会に向けて活発な情報交換や議論が行われた。

（小玉知央）

もう駄目だ。暗礁に乗り上げた宿選定作業を稲飯が諦めかけたその時、小玉により電子的情報共有基盤が構築された。これにより運営者間の意見交換が活発化、作業効率が飛躍的に向上し、激論の末、遂に「つくばセミナーハウスの貸し切り利用」という一筋の光が我々の行く先を照らすに至った。こうして箱根からつくばへ、時に互いの思いをぶつけ合い、同時に個性を織り重ね、漠とした青い写真はやがてひとつの鮮明な像へと結ばれていった。（稲飯洋一）

4. 発表に向けての苦悩と当日の反響

4.1 昼のセッション

スタッフメーリングリストでのやり取りで、参加者全員が発表するというのが決まったが、「全員発表なんて、眠くなるだけではないか」というのが最初の心配だった。参加者は27人、全員に発表してもらおうとしたら、1人当たり10分程度。話し手にとっては短いかもかもしれないが、聞き手にとっては全員分となると4時間以上で、長い。どういう発表スタイルにすれば飽きずに聞いていられるのか。考えた結果、「自己紹介をする」という発表スタイルに行きついた。これは、各参加者に10分間（質疑込）の時間を与えて自由に話してもらい、その中に必ず自己紹介を含めてもらう、というものである。正直なところ、交流の場なのだから自己紹介するのは当たり前なので、そんなにゆるくて大丈夫なのだろうか、とちょっと心配だった。

当日、各参加者の発表が始まると、このような心配は無用であることが分かった。それぞれ自己紹介も兼ねつつ、自分の誇りとする研究成果や最新の研究成果、観測・解析手法開発の苦労話、将来に描く夢などが、躍動感を持って生き生きと語られ、充実した時間となった（第1図）。個々の発表は瞬間間に過ぎていき、短い発表時間の中でも、各参加者の個性を率直に垣間見ることができたのでは、と感じている。様々な

色のついた自己紹介や研究内容は、各参加者とのつながりを見出し、研究の幅や視野を広げるきっかけになったと思っている。今回の交流会の発表を機に、今後のさらなる人脈の拡大と、研究の発展に繋がることを期待している。（沢田雅洋，坂井大作）

4.2 夜のセッション

夜のセッションの話題は参加者に事前に公募した。公募を行う前は、応募がなかったらどうしようかと他のスタッフとも気をもんでいたが、蓋をあけてみれば多数の応募が寄せられ4つの発表が行われた。まず、伊藤（京都大学）による「みなさんは海外に行きますか？行きませんか？」という問題提起に始まり、茂木（JAMSTEC）による「個人の嗜好とプロジェクトの指向の接点探索」の共同研究といった、いま若手として困っていること、直面していること、だけではなく、これからますます重要となってくるであろう、川瀬（国立環境研究所）による「これからの研究者とメディアの関わり方は？」まで幅広い話題について熱い議論が繰り広げられた（第2図）。あっという間に時は過ぎ、みんなほろ酔い気分で乗ってきた頃に、稲飯（名古屋大学）による「本交流会の略称の決定とロゴ撮影会の提案」がおこなわれ、略称をYMO（Young Meteorologists' Overnight session）とすることが決まり、人文字の影をプロジェクターで壁に投影することでYMOのロゴ撮影が行われた。その後、セッションは一応終了となったが、ほとんどの参加者は2時、3時ぐらいまで熱い議論をしていたのが印象深かった。（中野満寿男）

5. 交流会を終えて

本交流会には、10研究機関からポスドク研究員を中心に大学院博士課程3年生も含めて計27名が集い、昼夜を問わず熱い議論を繰り広げることができた。今回は、運営側の負担を減らすために準備にかかる労力を最小限に抑えたにも関わらず、参加者からも好評であった。「研究機関は関東に集中しているため、地方にいるとなかなか若手の研究者と交流できないのでよかった。」という意見や「今回は参加者が27人で会場も貸し切りだったのでフレキシブルにやれる良さがあった。」という意見も出された。一方で、「参加者が50人に増えたら同じ形態の会合は難しい」ということや、「家庭を持っている人は参加しづらい」という課題も残った。また、今回は気象気候系の研究者に限定



第1図 昼のセッションの様子。



第2図 夜のセッションの様子。お酒を片手にここだけの深い話。

したが、海洋系や農業気象など応用気象学など隣接分野との交流についても今後の課題となった。さらに、開催日数を増やした方がいろいろな人が参加できるなどの意見も出された。

気象学・気候学およびその周辺分野において、学問分野や研究内容・方法論が細分化され、自分の所属する機関やプロジェクトに関する研究内容を把握することで精一杯になってしまう現状において、交流会は同世代の参加者の幅広い研究活動を知る良い機会になった。参加者同士による横のつながりが、この会などを通じてさらに広がり、気象学会の大会などでも交流を深めていくきっかけにもなればと思う。本交流会が今後も継続していく上で、参加メンバーは回を追うごとに代わり、会の内容などについては変化し続けるだろうが、多くの参加者が満足できる会合として発展していけば、と期待している。（井上知栄，永野良紀）

6. おわりに 一はじまりは3人の何気ない会話から—

本交流会は杉本、下瀬、川瀬3名の何気ない会話から始まった。以下、本会を立ち上げた3名の雑感である。

6.1 「新しいコトは呑みの席で決まる」

これは、杉本がサイエンス以外で師匠から学んだことの1つである。つくば市内の某居酒屋にて、ちょうど3杯目のビールを飲み終える頃だった。

『若手研究者という枠の中で、新たな研究発案ができる交流の場が欲しいね。無いんだったら、3人で作っちゃえばいいんじゃない?』

会に対するお互いのイメージを確認し、思わず電話を手取る。「…あっ、沢田さんですか。若手研究者を対象にした交流会みたいなのをやろうって言ったら、来てくれます? (杉本)」「うん、行きたい。(沢田)」

あれから、およそ10か月。我々の思いつきは、「気象気候若手研究者交流会」という形で実現された。この会の中で、私は1つ2つ共同研究の種を見つけ、早速コンタクトを取るようになった。他の参加者からも、「若手主導で…」というキーワードが聞こえてきている。

今回は3人の「やりたいね」を形にすることが最大の目的だった。周囲からは、我々が想定していた趣旨とは異なる提案も頂くことがあったが、3人の「やりたいね」ではなかったのが今回の交流会では取り上げないことにした。独りよがりの会だと批判されるかもしれない。でも、私たちはこれをきっかけに、他から発信された何かに相乗りするだけでなく、各々の「やりたいね」を自ら発信できる雰囲気を広げたいと思う。(杉本志織)

6.2 動機と準備。そして応答。

最初にも述べたが、この会を催すにあたって、3つの動機が下瀬にとっての原動力となった。

- ①他研究者(特に同世代)との交流
- ②分野の枠を超えた共同研究の萌芽の場の創設
- ③主体性をもつ人々による集団の形成

ここでは3つの動機に関する準備とその応答をお話する。

1泊2日というスケジュールで、濃厚な交流がもてるような場を作り、各人に発表機会を設け、夜は懇親会を準備した。発表のフォーマットなど極力用意せ

ず、それぞれが主体性をもってやれるよう、また懇親会時に議論したいテーマを自由に持ち込むことが出来るよう計らった。それに対して全国から約30の応答があり、さらにこの会の趣旨に関しても多方面から様々な意見をいただいた。批判的な意見もいただいたが、それも主体性のひとつであり、今後、この会をきっかけに批判をされた方が新しいものを創造していただけたら、それはそれで動機を達成できているので良とする。交流という面に関しては、この会をきっかけとして、新たな会が発足する兆しもあり、非常に良い応答を得たと感じられる。また、夜の懇親会とセッションでは、特にフォーマットは用意していなかったが、予想以上の盛り上がりを見せ、一人一人が主体的にひとつのテーマに関して議論している様子が印象的であった。さらに、この会を今後も継続するかという議論になったとき、多くの人々が次期役員を買って出られ、主体性をもった集団の相互作用の素晴らしさを身をもって感じる事が出来た。

以上をまとめると、動機と準備に対する応答は申し分なく、非常に達成感のある企画となった。ともに主だって企画した川瀬・杉本両氏、更に準備に携わったスタッフに感謝する。(下瀬健一)

6.3 思いを現実に

つくばの居酒屋で語りあった3人の思い。それは若手研究者が集まって、個々の研究経験を活かした研究交流、夜はお酒を片手に楽しくも深い話をする事。3人でやることは簡単だが、大勢を集めてやるのは大変だということで、いつも飲み席だけの話で終わっていた。ただ、今回は違った。いろんな人に声をかけ、実現に向けて一步一步近づいていく。最初は3人、5人、10人、15人…。そして最終的には27名にまでその輪が広がり、9月4日、ついに若手研究者交流会の実施にまでこぎつけた。ただ、ここでもまだ不安はあった。いろんな考えを持った多くの若手研究者。はたして私たち3人の思い描いたような会になるのだろうか。失敗するのではないだろうか…。会が始まり、趣旨説明、昼間の研究発表セッション、夜のセッション。予想以上に順調に進む。2日目、今後の交流会のあり方についての議論、そして、最後の写真撮影。3人が真ん中に座り、写真を撮り終えて拍手が起こった瞬間、それは3人の思いが現実になった瞬間だった。

ただ、これで終わりではない。本交流会をもっと多

くの人に知ってもらい、より良いものにして後世につなげていく。それが一つの夢を叶えた川瀬の新たな夢である。

最後に、交流会に参加して頂いた皆様、本交流会開催に際して、ご助言ご意見を頂いた多くの皆様に、心から感謝したい。
(川瀬宏明)

第2回若手研究者交流会は2011年の夏～秋に開催する予定です。今回は運営メンバーを一新しますので、また新しい形の交流会が開催されると思います。是非ご参加下さい。なお本交流会にご関心を持たれた方は、交流会スタッフまでお気軽にお問い合わせください。

(URL) http://wakate.sakura.ne.jp/wakate_1st

(Email) admin@wakate.sakura.ne.jp

謝 辞

本報告執筆にあたり、本会の運営にも関わった国立環境研究所（現在プリンストン大学/GFDL 滞在中）の山下陽介氏、筑波大学の寺崎康児氏から助言を頂きました。また、「天気」の編集委員である海洋研究開発機構の茂木耕作氏と東京大学の柳瀬 亘氏には、執筆にあたり多大な協力を頂きました。

参 考 文 献

柳瀬 亘, 中村 哲, 伊藤耕介, 茂木耕作, 川瀬宏明,
2011: 若手連携の萌芽 ～気象気候若手研究者交流会に参加して～, 天気, 58, 261-268.